

# 別紙説明書 加工用米・低コスト生産等の取組メニュー

- 加工用米の低コスト生産等の取組を行う際には、以下に記載する取組基準等の詳細をご確認ください。
- 確実に実施する取組を**4つ以上選択**してください（※実際に行った取組メニューが4つ以上となる必要があります。ほ場の状況等により、作業が不要となる可能性のある取組メニューを選択する際にはご注意ください。）。
- 多収品種「ふくおこし」と他の品種（コシヒカリ等）を栽培した場合は、**13番（多収品種）と7番（作期分散）が該当するので、他に2つ以上の取組を選択すれば良いこととなります。**
- どのメニューに取り組みば良いかわからない場合は、JAながのアグリサポート信濃町（電話 255-6239）又は信濃町役場産業観光課農林畜産係（電話 255-3113）までお問合せください。

番号	取組メニュー	内容（取組基準の詳細）
1	直播栽培	湛水直播栽培や乾田直播栽培 ・育苗作業を省略し、直播に対応した播種機等を用いて種もみを直接ほ場に播種する栽培を行うこと
2	疎植栽培	地域の慣行栽培における移植密度に比べ密度を低くし、移植に要する苗箱数を減らす取組 ・疎植に対応した田植機を使用し、苗の移植密度を地域の慣行レベルの80%以下又は48株/坪（14.5株/m <sup>2</sup> ）以下とすること
3	高密度播種育苗栽培	地域の慣行栽培における育苗密度に比べ密度を高くし、移植に要する苗箱数を減らす取組 ・慣行栽培（乾籾100～150g（催芽籾125～187g））より育苗密度が高くなるよう、乾籾250～300g（催芽籾312～375g）を播種・育苗し、高密度播種育苗に対応した田植機を用いて移植すること
4	プール育苗	プールを設置し、プール内に苗箱を置き湛水状態で行う育苗
5	温湯種子消毒	農薬を使用せず、約60℃の温湯に種籾を浸漬し、種子消毒を行う取組
6	効率的な移植栽培	無代掻き移植栽培（※1）、乳苗移植栽培（※2）のいずれかに取り組みむこと （※1）耕耘砕土後に入水し、しばらく放置した後、代掻きを行わずに苗を移植する （※2）葉齢が2葉未満の苗（乳苗。育苗日数は7～10日程度）を移植する
7	作期分散	作期の異なる複数品種を作付けし、作期を分散する取組 <b>必ずしも加工用米だけで複数品種を作付けし、作期を分散する必要はなく、ふくおこしと他品種（コシヒカリなど）を作付けしていれば該当します。</b>
8	土壌診断等を踏まえた施肥・土づくり	土壌診断等に基づく施肥、有機質資材や土壌改良資材の施用 ・pH、窒素、リン、カリについて分析を行う土壌診断又は葉緑素計を用いた葉色診断の結果に基づいて、肥料や有機質資材、土壌改良資材を施用すること
9	効率的な施肥	流込み施肥（※1）、育苗箱全量施肥（※2）、側条施肥（※3）のいずれかに取り組みむこと （※1）水口に流込み施肥装置を設置し、肥料を灌漑水とともに流し込む （※2）苗箱内に層状に施肥する機械又は肥料と床土を均等に混合する機械を使用し、苗箱内に1作期分の肥効調節型肥料を施用する （※3）側条施肥に対応した田植機を使用し、移植と同時に株溝の土中にすじ状に肥効調節型肥料を施用する
10	効率的な農薬処理	播種時同時処理（※1）、田植え同時処理（※2）のいずれかに取り組みむこと （※1）専用の機械を使用し、播種と同時に農薬を処理する （※2）専用の機械を使用し、移植作業と同時に農薬を処理する
11	化学肥料の使用量削減	堆肥利用等により、化学肥料の使用量の30%以上削減 ・化学肥料の使用量を地域の慣行レベルと比べて30%以上削減すること
12	化学農薬の使用量削減	総合的な防除体系の確立等により、化学農薬の使用量の50%以上削減 ・化学農薬の使用量を地域の慣行レベルと比べて50%以上削減すること
13	多収品種の導入 <b>※「ふくおこし」が該当します</b>	多収品種の作付 ・「需要に応じた米の生産・販売の推進に関する要領」に規定されている多収品種を作付すること
14	農業機械の共同利用	地域における農業機械の共同利用やシェアリングサービスの活用 ・農業経営体間で農業機械の共同利用を行うこと又は農業機械のシェアリングサービスを活用すること
15	スマート農業機器の活用	ドローンや水管理システム等の活用 ・ロボット、AI、IoTなどの先端技術を活用したスマート農業機器・システムを使用すること